

柏原市所在遺跡発掘調査概報

——大県・田辺・本郷遺跡——

1983年度

1984年 3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市においては、昭和58年度も多数の発掘調査が実施されました。本書では、その中でも比較的小規模な原因者負担事業についての概要を報告しています。

原因者負担による発掘は、誤解やトラブルを招くことが多く、調査費用、調査期間、調査における安全性等、多数の問題が生じてきます。特に、小規模な調査においては、多くの困難を伴います。しかし、最低限の調査は必要であり、また、調査を実施すれば、その成果を公開する義務があります。

本書で報告する調査の原因者の方々には、この点に関して理解を示して頂き、十分とは言えないながらも発掘調査を実施し、本書を刊行することができました。また、遺跡の保存等に際しても協力して頂き、文化財保存の面でも成果があったと思います。

今後とも、柏原市は、これらの原則のもとに調査を進めていきたいと思いますので、御理解・御協力を惜しまれることのないよう、よろしくお願いします。

調査、および本書の刊行に御協力頂いた関係各位、また地元の方々に改めて謝意を表わします。

昭和59年3月31日

柏原市教育委員会

例 言

- 本書は、柏原市教育委員会が昭和58年度に、原因者負担事業として実施した発掘調査中、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した各調査の概要報告書である。
- 各調査の整理、および本書の編集・執筆は安村が担当した。
- 調査・整理に際しての協力者は、下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	花田勝広	広岡 勉
大塚淳子	松田光代	山内 都	秋田大介	石田成年	井宮好彦
上條裕典	佐藤 尚	山中 茂	藤岡弘子	麻 栄三郎	朝田行雄
井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎	西岡武重	道篠甚藏	森口喜信
山田貞一	山本芳一	及一敏恵	松成早苗		

目 次

大畠遺跡	本郷遺跡—1
1. 調査経過.....	1. 調査経過.....19
2. 位置と環境.....	2. 位置と環境.....20
3. 調査成果.....	3. 調査成果.....21
4. まとめ.....	4. まとめ.....24
田辺遺跡	本郷遺跡—2
1. 調査経過.....	1. 調査経過.....25
2. 位置と環境.....	2. 調査成果.....26
3. 調査成果.....	3. まとめ.....28
4. まとめ.....	18

おお 大 県 遺 跡

1. 調査経過

柏原市平野2丁目、堅下幼稚園南側の広場に住宅が建築されることになり、試掘調査を実施したところ、地表から110cm以下で古墳時代、奈良時代の遺物包含層が確認された。しかし、建物の基礎深度が浅いため、住宅内の道路敷を一部だけ調査することにし、6月29日より7月4日まで、原図者、国陽開発株式会社の負担で調査を実施した。

調査は3m×10mの南北方向のトレーニングを設定して行い、2本の溝を確認した。

2. 位置と環境

調査地は生駒山地の西麓にあたり、標高は約24mである。大県遺跡内の過去の調査では、5世紀末葉～6世紀にかけての遺物が大量に出土しており、特に轆、鉄鋤等の鍛冶関係の遺物が豊富に見られ、遺構も一部で発見されている。相当広範囲にわたり、鍛冶を生業とした人々が生活していたことは確実であるが、その住居址は現在のところ未発見である。

また、河内六寺の一つ大里寺に比定されている大県庵寺が存在する。その創建は飛鳥時代に遡り、今回調査地の南側、現天理教駐車場内に礎石が数個存在したということであり、付近に大慈寺の小字名も残るが、正確な位置は不明である。



図-1 調査地位置図

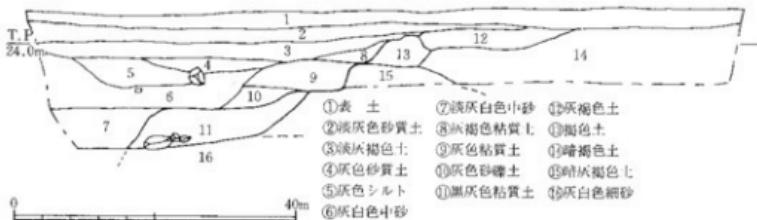


図-2 トレーニング西壁土層図

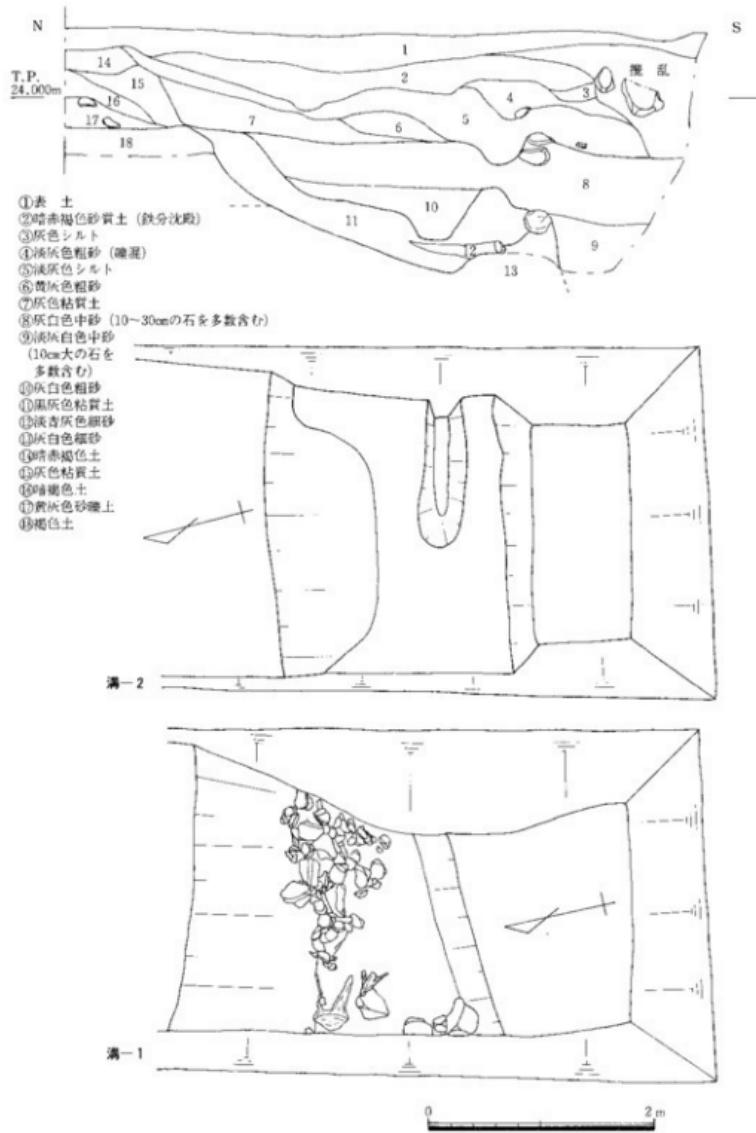


図-3 遺構実測図

3. 調査成果

① 遺構

褐色土・暗褐色土を掘り込んで東西方向の二本の溝が切り合っている。下層の溝一1は黒灰色粘質土を埋土にし、南側は上層の溝一2によって削られてい。幅は4m前後、深さは1.6m前後と推定される。溝一1の北壁は花崗岩等の自然石を乱雜に石垣状に積み上げて護岸している。その石垣の間には1本の樹根が残っていた。遺物は須恵器、土師器、製塙土器、繩の羽口、鉄滓、砥石、木製品、桃の種子、鹿骨である。

溝一2は、北壁を溝一1とほぼ同一にし、溝一1の上面を平坦に削平し、更に南側へ広く深く掘り込まれ、二段掘になっていたと考えられる。溝一1上面の平坦面東半には、細く浅い溝がみられるが、これも溝一2と同一時期と考えてよいであれう。埋土は灰白色の砂、シルトであり、30cm~50cmの自然石が多く見られる。これらの石は何らかの理由で投げこまれたものか、あるいは流水によって運ばれてきたものは不明である。溝の埋土は大きく二層に分けることができ、下層の淡灰白色中砂の遺物は溝一1の遺物とほとんど時期差がみられない。しかし、層位から溝一2が新しいことは確実であり、溝一1の土器と比べ、小片が多いことも目立つ。上層の灰白色中砂も6世紀代の遺物が多く見られるが、8世紀の須恵器、屋瓦を含んでいる。

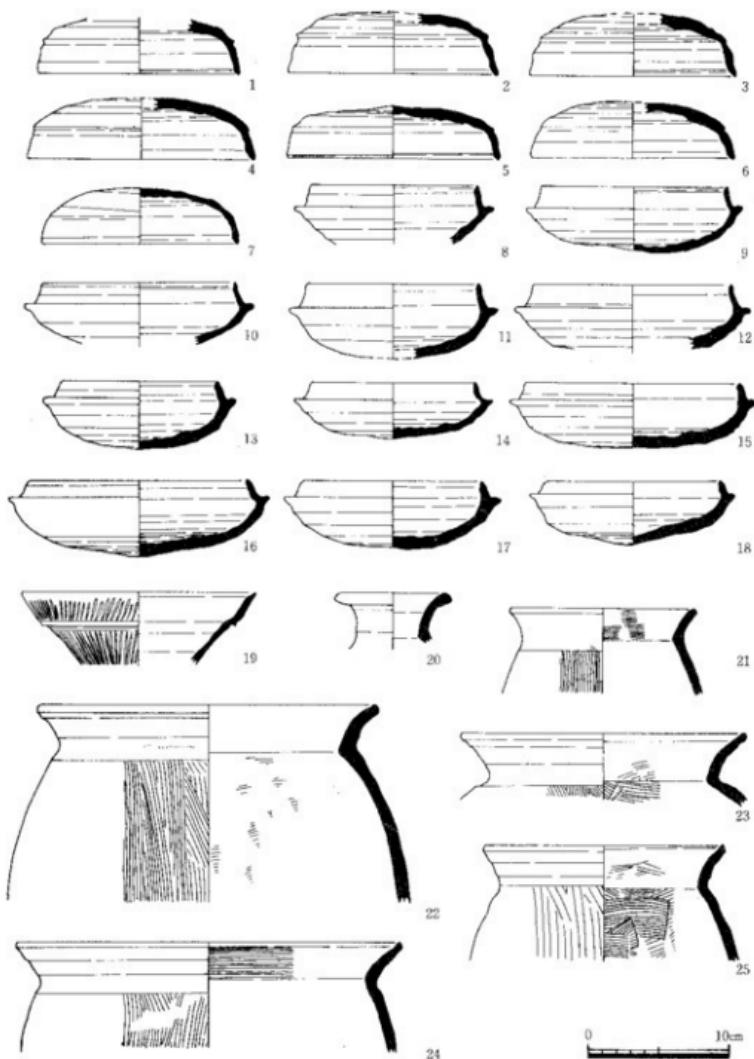
② 遺物

土器

溝一1から出土した須恵器の大半は蓋杯であるが、掘削範囲の狭さから考えると、その数量は非常に多い。杯蓋（1~7）は、比較的棱の鋭いものから棱のみられないものまであり、杯身（8~18）もこれに対応するものである。19は瓶の口縁部で外反気味の口縁が棱をなし、更に伸びる。外面には棱の上下二段に縱方向のヘラ描文がみられる。20は提瓶の口縁部であろう、端部は折り返し、肥厚する。



図-4 調査地周辺平板測量図



図—5 満一1出土土器

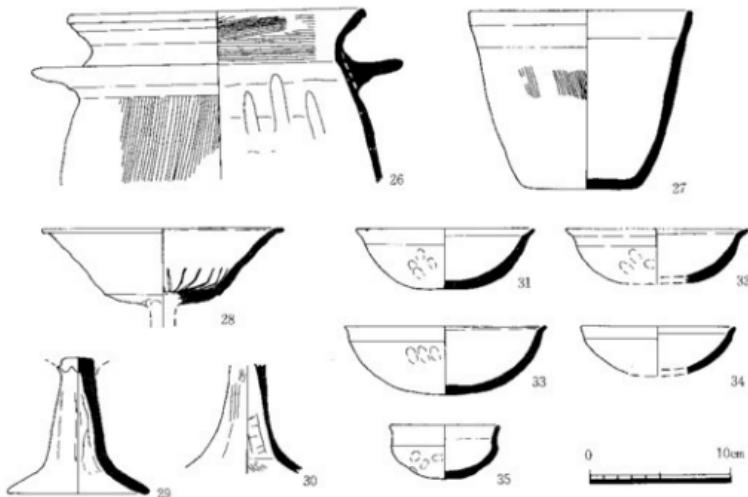
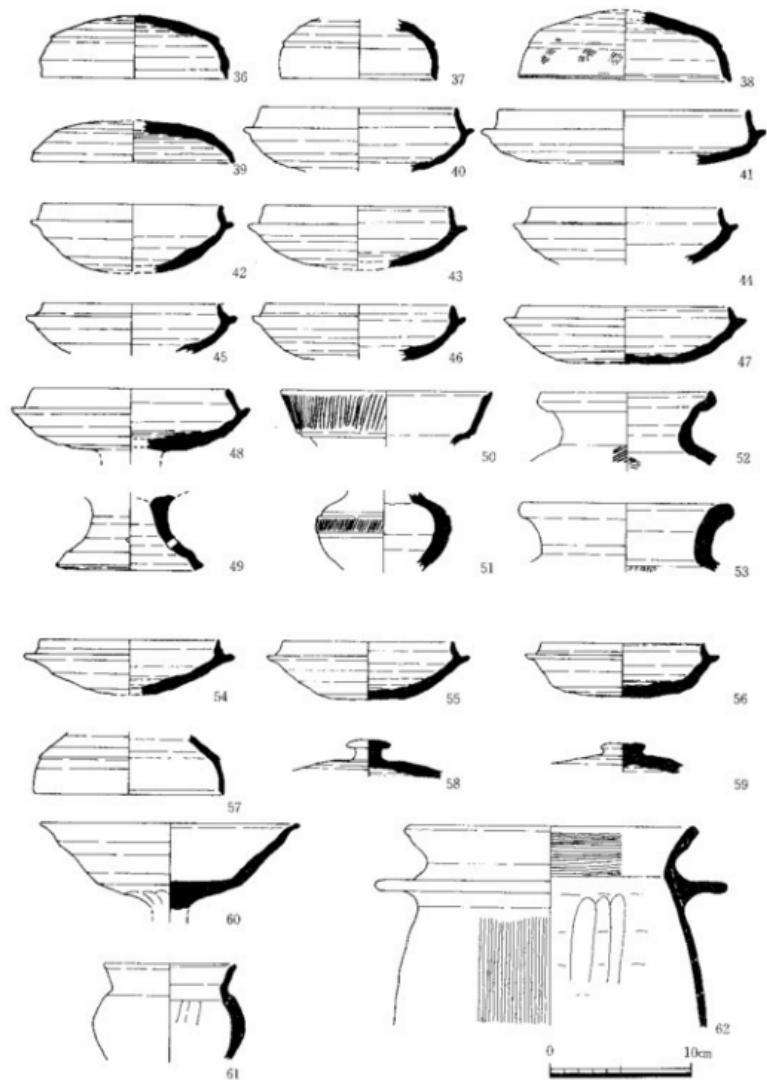


図-6 溝-1 出土土器

土師器の甕（21～25）は、すべてハケ調整を基本にし、内面にはナデを施すものもある。口縁端部が肥厚し、縦長の形体を示すものが多い。羽釜（26）は、口縁部外反し、端部は肥厚する。体部外面タテハケ、体部内面タテ方向のナデ、口縁部内面ヨコハケ、他はヨコナデを施す。生駒西麓の胎土である。27は鉢であり、口縁は体部からほぼ直立し、ヨコナデを施す。体部外面はタテハケからナデ、内面はヘラケズリからナデを施し、淡橙色を呈する。高杯（28～30）。28は杯部で内底面に放射暗文を施す。杯部は、ほぼ水平に広がり、弱い稜をなして上外方に広がり、口縁端部はほぼ水平に外反する。29、30は脚部でともに外面はタテ方向のナデを施すが、内面は29はナデを施し、シボリ目が残るのに対し、30はヘラケズリの後、ナデを施し、縁部にはハケメもみられる。31～34は杯であり、いずれも浅い体部、ヨコナデによって外反する口縁を有する。外面は指頭押圧、ナデによって調整し、内面はナデを施す。35は小型の甕であり、手法は31～34と同一である。

溝-2 の下層、淡灰白色中砂から出土した遺物は（36～53）であり、土師器は良好なものがない。蓋杯（36～47）は、溝-1 の遺物と比較すると、やや新しい時期のものが多いが、顕著な差は認められない。48・49は高杯の杯部と脚部である。脚部は弱い段をなして縁部が広がり円形の透孔がみられる。50・51は甕であろう。50は段をなして広がる口縁部で、タテ方向のヘラ描文が巡る。51は体部中央に二条の回線がみられ、その間に刺突文がみられる。52・53は甕の口縁部で、52は口縁端部が肥厚した後、直立し、53は厚く肥厚する。



图—7 满—2出土土器

溝一2の上層、灰白色中砂からは54~62の遺物が出土している。杯身(54~56)は、受部の立ち上がりの低いものが多く、杯蓋(57~59)は、偏平なつまみを有するものもみられる。土師器は高杯(60)、小型丸底壺(61)、羽釜(62)などが出土している。

それ以外に、試掘調査、機械掘削中に出土した土器がある。試掘調査で出土した土器(63~78)は、今回調査したトレンチの南側で実施した試掘場から出土したものであり、今回の調査から考えると、溝一2の遺物と考えられる。須恵器は蓋杯(63~72)と盤(73)があり、土師器は甕(74)、瓶(75)、小型丸底壺(76)、椀(77~78)がみられる。79は盛土の機械掘削中に出土した黒色土器であり、内面と口縁部外面に炭素の吸着が認められ、口縁部内面に一条の凹線がみられる。出土層位は不明。これら以外に、瓦器の細片も出土している。

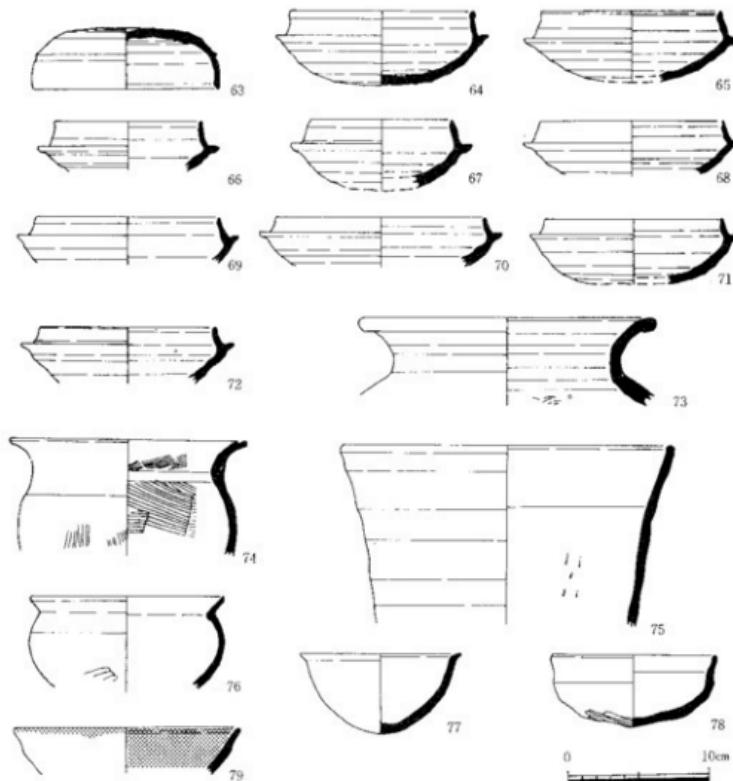


図-8 試掘調査出土土器

轆

轆の羽口は開化できるものが3点出土している。いずれも先端近くであり、溶融がみられる。直径は外径7cm前後、孔径3cm前後である。色調は淡褐色を基調とするが、先端近くは二次焼成によって、種々の色調を呈する。胎土は粗い。3点はいずれも溝一2からの出土であるが、溝一1からも小片が出土している。

鉄滓

鉄滓は溝一1・2から出土しており、最大のもので約10cmの大きさである。いずれも多孔質で、炭の付着したものもみられる。色調は灰色、黒灰色が多い。総重量1760g。

屋瓦

1は唐草文軒平瓦であり、内区には唐草文、一重の囲線によって画される外区四周には珠文がみられる。焼成は甘い。過去の出土例から、奈良時代の均整唐草文になると考えられる。

2～6は平瓦であり、凸面の叩き目の違いによって4類に分類できる。I類(2)はジグザグの繩目叩きを施すものである。側面ヘラケズリ調整、凹面の模骨痕の幅約1.2cm、粘土の継ぎ目がみられ、桶巻作りである。平瓦総数39点の中、16点、41%を占める。焼成によって、軟質、硬質に二分することが可能である。同種の平瓦は、柏原市内では、片山廃寺、東條尾平廢寺、山下寺跡でみられる。II類(3)は縷杉叩きを横方向に施すものである。側面ヘラケズリ調整、模骨痕の幅2.5cm、桶巻作りである。4点、10.3%を占める。III類(4)は、斜格子叩きを施した後、平行叩きを施す。模骨痕の幅1.7cm、桶巻作りである。1点のみ出土している。IV類(5)は4本/cmの粗い繩目叩きを施す。桶巻作りか一枚作りか判別困難なものが多いが、大部分は一枚作りと考えられる。13点、33.3%。これら以外に、一枚作りと考えられる無文のものが5点ある。おそらく、繩目叩きをナデ消したのであろう。I～III類を桶巻作り、IV類を一枚作りと考えると、桶巻作り53.8%、一枚作り46.2%と約半数ずつ占めることになる。

6は丁類に含まれるが、凹面に模骨を縮めていたのではないかと思えるタガ状の帯の痕が残っている。この帯の部分にも布目が残っていることから、模骨をつないで桶棒を作り、更にその外側にタガ状のものを巻いて桶棒の形を固定していたものと思える

屋瓦はすべて溝一2の上層から出土している。

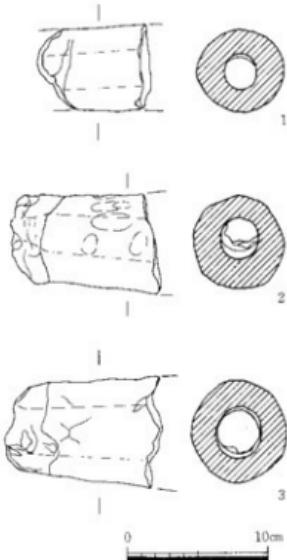


図-9 輪尖測図

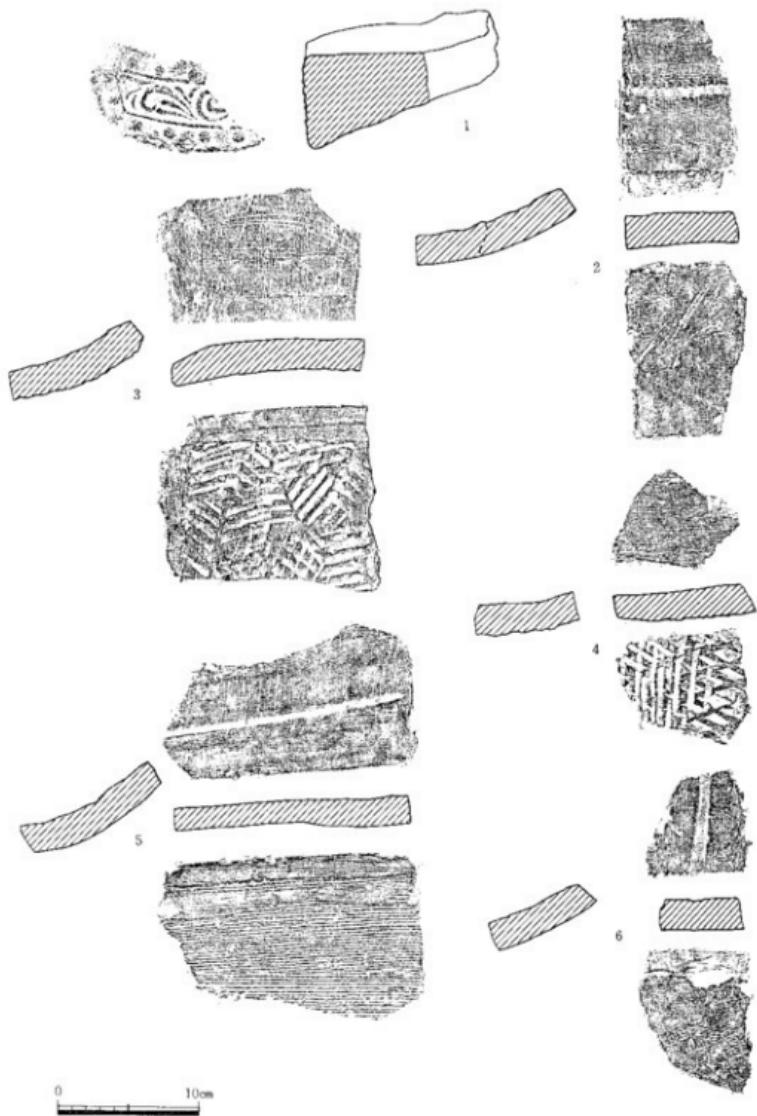


図-10 瓦実測図・拓影

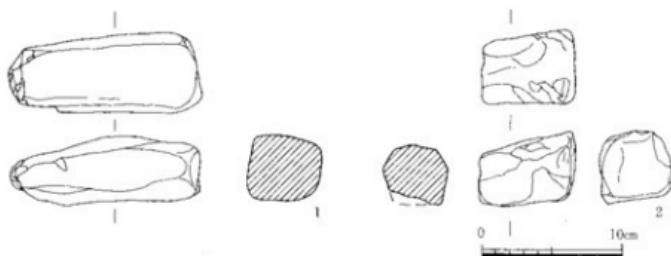


図-11 石製品実測図

石製品

1は叩石であろう。先細りで、先端には明瞭な使用痕が残るが、全体の整形は粗雑である。試掘調査時出土。

2は砥石である。5～6面をなす凝灰岩であり、一部火を受けている。同石材の砥石が他に1点存在する。いずれも溝-1から出土している。やはり、鍛冶と関係するものであろう。

それ以外に、溝-2の上層から勾玉が出土している。碧玉製で屈曲は弱く、頭部と尾部で直角に近く屈曲し、先端は尖り気味になる。穿孔は片面から施されており、もう一方の面は、広く擂鉢状に整形されている。色調は頭部と尾部が暗緑色、体部がややくすんだ淡緑色である。

その他の遺物

これら以外に製塙土器、若干の木製品、桃の種子、獸骨がある。

製塙土器は溝-1から小片が2点出土している。いずれもコップ状のものである。

木製品は、0.5～1cmの太さに削った長さ10cm前後の棒状のものが數本みられ、その大部分の先端が焦げている。用途は不明であるが、あるいは炉に火をつける際に使用したものかもしれない。これも鍛冶と関係があると考えられる。

桃の種子は16個出土している。大きさは、1.5cm～3cmで一定しない。焼けたものもみられる。

獸骨は數十点出土しているが、出土状況からは、埋葬したものとは考えられない。鑑定していないため、獸種は不明であるが、馬の下顎骨、歯、足の関節等がみられる。加工した痕跡はみられない。

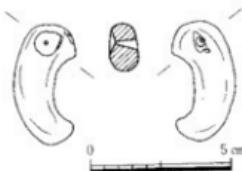


図-12 勾玉実測図

4.まとめ

今回の調査では、溝が2本確認された。下層の溝一1は出土した土器から5世紀末葉から6世紀後葉と考えられる。大県遺跡では、この時期の遺物が大量に出土するが、遺構はあまり確認されていない。しかし、溝一1からは多くの土器が出土しており、住居址の近いことが想像される。また、これまでの調査と同様に、鍛冶関係の遺物が多数出土しており、大県遺跡が鍛冶を営む工人集団を中心とする遺跡であることが確認されつつある。

溝一2は下層に6世紀代の遺物を含み、上層は6世紀～8世紀の遺物を含む。溝一2は層位的に溝一1より新しいが、その掘削時期は明瞭でない。下層に新しい時期の遺物が含まれていないことを重視すれば、6世紀末葉と考えられる。しかし、下層の遺物は破片が多く、また、7世紀代の遺物が屋瓦以外に見られないことを考えると、掘削時期が8世紀まで下ることも考えられる。上層の8世紀代の遺物は屋瓦に比して、土器の量が少ないとから集落の遠いことを予想させる。調査地は大県廃寺の推定寺域の北辺近くにあたり、あるいは大県廃寺寺域北限の溝とも考えられる。

これまでの調査から、大県遺跡は鍛冶工人集団を中心とする集落から、寺院に移り変わったと考えられる。しかし、6世紀代の土器に比して、7世紀代の土器の量が異常に少なく、集落から寺院に変遷する間にどのような変化が生じたのか。6世紀に居住していた人々が寺院を造営したのか、あるいはその間に断絶があるのか、寺院を支えた氏族の集落はどこに存在するのか等、種々の問題を残している。

また、大県遺跡東側の山地斜面に広がる群集墳には、鍛冶工人集団によって築かれたものが少なからず存在するのではないだろうか。出土土器と群集墳の盛行する時期はほぼ一致し、横穴式石室内から鉄滓を出土する古墳も存在する。工人集団と群集墳という関係が各地で考えられており、今後注目する必要があると思う。

大県遺跡は遺構面が深く、本格的な調査は実施されていない。しかし、それだけに良好な状態で遺構が残っていることも予想される。保存を考慮して、今後とも慎重な調査を実施ていきたい。

田辺遺跡

1. 調査経過

柏原市国分本町6丁目で、宅地造成の計画があり、造成に伴う緊急発掘調査を1983年8月26日から9月27日まで実施した。当初、住宅建築予定地のみの調査を予定していたが、住宅建築に伴う道路の設置の届け出が出来、引き続き、その東側で現状地形を削平する土木工事の届け出が出来たため、これらを一括して調査を実施することにした。なお、調査費は造成業者である株式会社上田組の負担によるものである。

2. 位置と環境

調査地は、南北にのびる丘陵の稜線上から東にかけて位置する。調査地の南東は、過去に著しく削平され、崖面をなす。また、住宅建築予定地は、調査以前に、一部が造成されており、南半は既に地山が露出していたため、北半のみ、調査を行なった。

今回の調査地の南、約500mの地には、田辺廃寺が存在し、その周辺には、古墳時代から中世にかけての田辺遺跡が存在する。今回の調査地も田辺遺跡に含まれるのであるが、田辺遺跡

の中心と思われる田辺廃寺からは、やや距離があり、調査地の南側を横断する国道25号線付近で、丘陵の幅が狭くなり、標高もやや低くなるため、異なる集落である可能性も考えられる。これまでに、調査地の北側で、遺構は検出されていないものの、遺物は採集されており、調査地から北にかけて、集落が広がっていることが予想される。



図-13 調査位置図

3. 調査成果

調査地は3地区に分けられ、西端の宅地部分をⅠ区、中央の道路部分をⅡ区、東端の削平部分をⅢ区とする。

①遺構

Ⅰ区

Ⅰ区の北半では、約30cmの厚さの表土下に5~10cmの厚さの包含層が一部に残っていたが、南半では、ほぼ地山まで既に削平されていた。地山は黄褐色粘質土あるいは砂礫土である。

遺構は7~8世紀の掘立柱建物、14~15世紀の溝、近世と思われる窯跡などが発見されている。

7~8世紀の掘立柱建物に伴うと考えられる柱穴は、58個確認された。しかし、調査面積が狭いことと、溝、窯跡による削平、擾乱、造成に伴う削平で、遺存状況が良好でないために、建物の並び方は十分には明らかにできなかった。また、柱穴の出土遺物が少ないため、時期不明の柱穴も多数ある。以下、建物を構成する柱穴、時期の判明する遺物を出土している柱穴についてのみ記述する。

建物一は、ピットー5~15によって構成される3間×2間以上の総柱の建物である。ピットー5、6は、溝一の底面に痕跡を残すのみであり、50~60cm四方であるが、他の柱穴掘方は約100cm四方、柱の直径は18cm前後と考えられる。

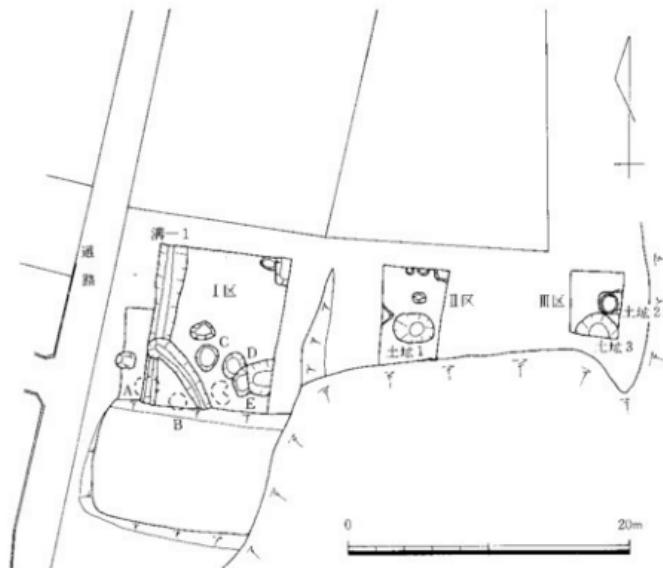


図-14 全体図

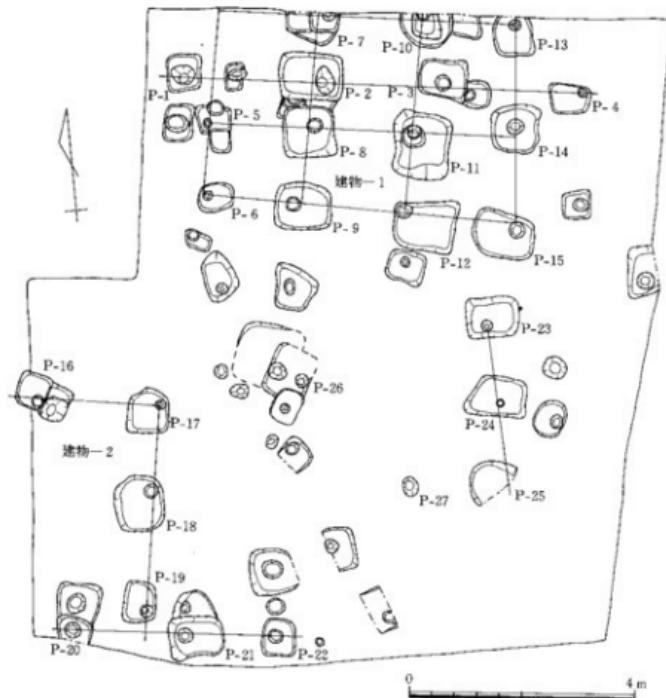


図-15 I 区掘立柱建物造構図

ピットー 8・11は、深さ50cmを測り、底面のレベル高がTP 41.5m 前後であるのに対し、他の柱穴は深さ10~20cm、底面のレベルがTP 41.8~42.1m となり、ピットー 8・11が異常に深い点が注目される。柱穴の間隔は南北方向に2m、東西方向に1.8m 等間隔となり、5.4m × 3.4m 以上の規模となる。南北方向の柱間が著しく異なる点に疑問も残るが、倉庫状の建物と考えてよいであろう。建物主軸はN-10°-E を示す。

遺物は、ピットー 6・11から蓋内面にかえりを有する須恵器杯蓋（5・6）、ピットー 8から蓋内面のかえりが消失した須恵器杯蓋が出土し、他は小片ばかりである。7世紀後葉頃であろう。

また、ピットー 1~4 が直線に並ぶ。ピットー 1・4 は建物-1 の棟持柱、ピットー 2・3 は東柱の可能性がある。建物-1 と掘方の大きさ、深さともに近似し、埋土も同一である。遺物は、ピットー 2 から須恵器杯蓋（1・2）、土師器高杯脚部（3）、ピットー 3 から須恵器杯蓋（4）が出土しており、建物-1 とほぼ同時期か、やや新しいと思われる。

建物—2はピット—16～19で構成され、1間以上×2間以上の建物で、調査地区南西に更にひろがる。柱穴掘方は60cm～100cmの隅丸方形を呈する。柱間は2.1m、2.1mとなる。柱穴内からは時期を特定できる遺物が出土していないが、土師器・須恵器の細片が出土しており、建物—1と大きく隔たるものではないであろう。建物上軸はN—8°—Eを示す。

これら以外に、ピット—20～22が直線に並び、1.9m、1.7mの間隔を測る。おそらく、調査地南側に続いた建物であろう。ピット—21から高台を有する須恵器杯身の小片が出土している。

また、ピット—23～25も直線に並ぶが、南側は瓦溜めのため不明であり、東西に対応する柱穴も認められない。名柱穴掘方は約20cmの深さを残すのみであり、対応する柱穴が既に削平されていると考えられる。

これら以外の柱穴は、対応する柱穴が不明である。

溝—1は南北方向の溝であり、南東方向へのびる枝溝を有するため、Y字状を呈する。分岐点から北側では約180cmの幅、20cmの深さを有し、分岐点から南側の南北溝は幅約90cm、深さ約20cm、北西から南東へのびる溝は幅約120cm、深さ約30cmである。溝底面は南側が低いため、南流していたことがわかるが、分岐点以南では南東へのびる溝のはうが南北溝より深く、幅も広いため、南東へのびる溝が本流であったと考えられる。しかし顯著な遺物が出土していないため、時期が異なる可能性も考えられる。遺物は分岐点より北側で須恵質の甕の口縁部(13)、分岐点より南側の南北溝から瓦質羽釜(12)、土師器小皿(14～16)が出土している。

窯跡は5基確認された。いずれも直径1.5m前後の円形、もしくは楕円形平面を呈する。前半によって上部構造は全く不明であり、底面は浅く掘り込んだ土塙内に粘土を貼り付けている。粘土は赤く堅く焼き縮まっている。窯—E・Dの東側に、屋瓦の破片を廃棄した土塙が存在することから考えると、瓦窯の可能性が考えられる。しかし、窯の規模が小さく、瓦窯と断定することもできない。屋瓦の時期は、近世後期頃のものではないかと考えられる。

I区

II区は、4m×7m、約10～30cmの厚さの表土下が地山面となっており、土塙と下半を埋めた甕が検出された。

土塙は290cm×200cmの楕円形を呈し、底は瓶鉢状に深くなる。土塙内からは、土師器・須恵器、瓦質土器などが出土しており、時期は中世と考えられる。

甕は土塙状に掘り込まれた中に、下半を埋めた状態で遺存していた。上半は甕内に破片となって落ち込んでおり、当初から上半は地面より上に出ており、廃絶時に破碎されたものと思われる。おそらく、水甕として利用されていたのである。中世と思えるが、時期は特定できない。

その他は、擾乱が3箇所確認されたにすぎず、I区で多数発見された掘立柱柱穴は全く検出されていない。

II区

III区は3.4m×4.6mであり、約30~50cmの厚さの表土下に灰白色砂礫土の地山が見られる。

土壌が2基確認されている。土壌-2は、径110cmの円形を呈する。おそらく水溜めのようなものであろう。

土壌-3は、360cm前後の大きさと思える土壌で、更に南へ広がる。

土壌-2・3の時期は、いずれも明確にし難いが、瓦質羽釜などが出土しており、その時期が、中世を逆上るものでないことは、確かである。

②遺物

1~9は、I区掘立柱穴内から出土した遺物であり、10・11はI区包含層、12~16は溝1、17はIII区から出土した遺物である。

(1)は、須恵器杯蓋であり、蓋内面にかえりを有する。口縁端部は丸みをおびている。ピット-2出土。(2)も、須恵器杯蓋であるが、内面のかえりは消失し、口縁端部が明瞭に屈曲し、口縁断面は三角形状を呈する。ピット-2出土。(3)は、小型の土師器の高杯脚部である。内外面ともナデで仕上げられており、脚内面にはシボリメが残る。ピット-2出土。(4)は須恵器杯蓋。蓋内面のかえりが低く、鈍く、かえり消失直前のものと思える。口縁端部は厚く、丸みをおびている。ピット-3出土。(5)は、やはり蓋内面にかえりを有する須恵器杯蓋である。ピット-6出土。(6)も同様の杯蓋であるが、(5)と比較すると、かえりはやや低い。ピット-11出土。(7・8)は、須恵器杯身。とともにピット-26出土であり、やや外方に聞く高台を有し、体部が直線状に口縁にかけて広がる。口縁端部は、(7)はやや外反し、(8)は体部からまっすぐのびる。(9)は、須恵器高杯の杯部である。口縁体部は外反し、丸くおさめる。ピット-27出土。(10・11)は、ともにI区包含層から出土している。(10)は、須恵器杯身。底部は比較的平らで、口縁部は外方へ直線状にのびる。(11)は、土師器甕の口縁部。口縁部は外反気味で、端部外面は弱い面をなす。体部は浅く、丸みをもつものと思われる。口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整。

(12)は、瓦質羽釜。口縁部は、やや内傾し、厚く、端部は丸くおさめる。口縁外面に3条の凹線が施される。鈴は、やや短く、薄い。体部外面ヘラケズリ、内面はナデ調整を施している。

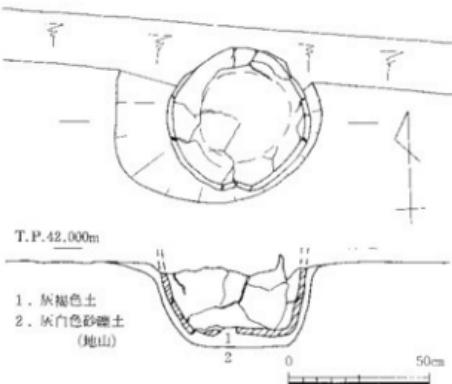


図-16 II区・埋甕

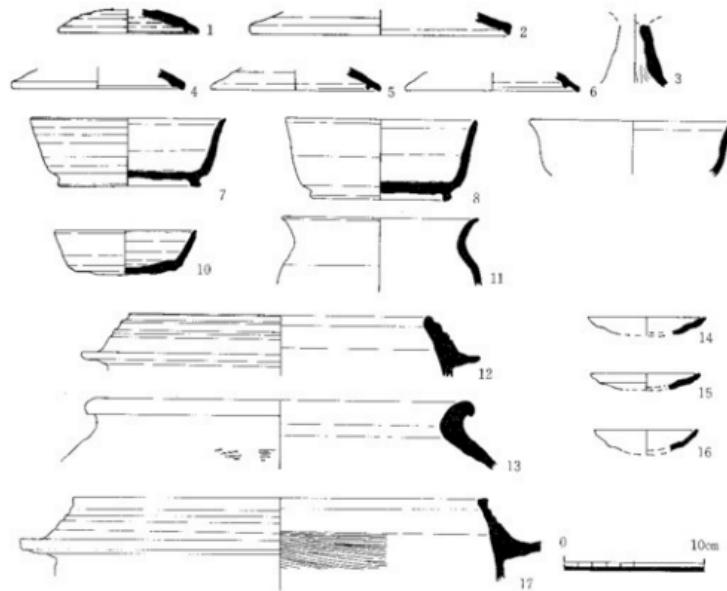


図-17 出土遺物実測図

(13) は、須恵質の陶器、甕の口縁部である。体部に比して、口縁は厚く、丸味をおびながら外反し、端部は垂下する。口縁・体部内面はナデ、体部外面は、平行タタキメが残る。(14~16)は土師器小皿。いざれも口径 8 cm 前後、体部は 1.5 cm 前後と浅い。内外面ともナデ、指頭押圧によって調整されるが、(15) は口縁部をヨコナデする。(12~16) は、溝-1 から出土している。

(17) は、Ⅲ区の掘削中に出土した瓦質羽釜である。口縁はやや内傾し、端部は面をなす。口縁外面には 3 条の凹線が施され、鋤は高く突出し、やや上向きとなり、端部は面をなす。体部外面ヘラケズリ、内面ヨコハケ調整。(12) に比して、やや大ぶりで、全体にシャープに仕上げられている。

(18) は、Ⅱ区で出土した甕である。口径 50.8 cm、器高 57.6 cm。底面は波を打っているが、体部は比較的整形されている。平らな底面から外方へ張り出し気味にたちあがる体部は、口縁から約 1/3 で最大径を示し、それより上部では、やや内傾気味になり、肥厚する口縁部へと続く。厚さは、底面で約 1.2 cm、体部から口縁にかけては、やや厚くなり、口縁直下では約 2 cm となる。調整は内外面とも丁寧にナデ調整されており、内面に一部、粘土の積み上げ痕が残る。甕の器高から考えると、甕の口縁は現地表面より 10 cm 前後高くなり、地表から口縁付近が露出した状態で埋められていたものと想定され、水甕などに利用されたと考えられる。

4.まとめ

掘立柱建物については、明確にできたものが2棟にすぎず、その他多数の柱穴の建物構成は不明である。

時期を明確にできる遺物は少ないが、7世紀中葉から8世紀前葉頃の遺物が出土しており、柱穴の切り合い関係などから最低3時期の建物が重複していると考えられる。

今回の調査においては、II区・III区ではこのような柱穴が発見されておらず、掘立柱建物群は、北側、西側に広がっているものと思える。しかし、現状では北側には宅地が密集し、西側は道路を隔ててぶどう畠となっており、その遺存が危まれる。

中世の遺構は溝・土塁のみであるが、生活用具である瓦質羽釜で煤の厚く付着したものが出土しているので、周辺に集落跡が存在すると考えている。

近世と考えられる窯跡については、瓦窯ではないかとの想定をし得たのみである。調査地近くに住む老人の談によると、「ここには瓦屋があった」とのことであり、あるいはこの遺構に関連するのかもしれない。

以上のような調査成果をもとに、建物一1を中心とするI区北半の遺構を盛土によって、住宅下に保存することにし、その他の箇所に関しては、現地形から考えて保存は困難であるため、削平を認めた。遺構の一部だけを、しかも住宅下に保存するという措置は、文化財保存としては、不十分なものであるが、小規模な造成でありながらも、造成業者が遺跡の重要性にある程度の理解を示し、保存に協力してくれたことは、ささやかな成果である。

調査地周辺は、既に宅地化されており、遺跡の状態が危ぶまれるが、先述したように、今回の調査地から北にかけて一集落が存在する可能性があり、その性格を明らかにする必要がある。そのため、今回の調査成果、および一部ではあるが、保存できたことを、今後の調査に生かしていきたい。

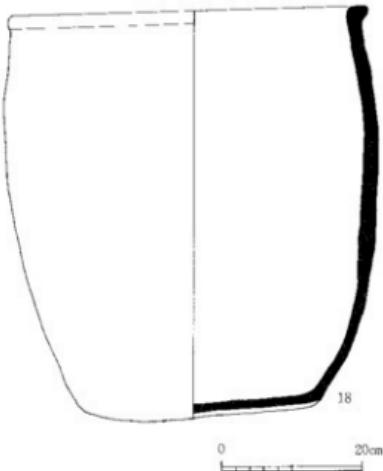


図-18 窪実測図

本郷遺跡—1

1. 調査経過

柏原市水道局より、柏原市本郷3丁目における水道管理設に伴う緊急発掘調査の依頼があり、試掘調査の結果、発掘調査の必要があると判断するに至った。それに対し、水道局から、水道管が埋設される市道に沿って工場が数棟あり、これらの工場の操業を考慮し、水道工事は夜間工事にするため、調査も協力して欲しいという申し出があった。しかし、夜間調査は不可能であり、協議の結果、①調査はトレントを3箇所に設定して実施し、各トレントは直径2mの円形鋼板で安全性を確保する。②他の部分は立会調査、および工事に際しての堆土を仮置し、遺物を採集する。③水道管は、できるだけ深度を浅くし、包含層への影響を最小限にする。④調査に伴う諸費用は、水道局と水道管と平行にガス管を埋設する大阪ガスの両者が負担し、両件を一括して調査を実施するという条件で合意に達した。

調査は、水道管理設予定地の西半に3箇所のトレントを設定し、1983年10月5日から12日まで実施した。また、必要に応じて水道管工事による堆土内の遺物採集を行なった。各トレントは、直径2m、高さ0.5mの組立て式円形鋼板を掘削深度に応じて順次組み立て、安全を確保しながら調査を進めた。調査は地表下3.5m前後まで実施した。

調査中には、地元の方からの苦情があり、地元の方々には大変迷惑をおかけした。今後とも、文化財に対する御理解をお願いしたい。



図-19 本郷遺跡調査地位置図

2. 位置と環境

本郷遺跡では、1980年と1981年に発掘調査が行なわれているのみであり、その規模、実態は現在でも十分に把握できない。これまでの調査では、縄文時代晩期の埋甕、弥生時代中期中葉の方形周溝墓、同後期の土塁、古墳時代前期の井戸などが発見されている。これら以外にも、6～8世紀および中世の土器、瓦、埴輪などが出土している。(柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1981年度』1982)

遺跡は旧大和川である長瀬川の左岸に位置する。自然堤防などの微高地に集落が営まれたのであろうが、調査地よりも南側の住宅密集地付近の標高が最も高く、今回の調査地は遺跡の北端付近にあたるものと思える。

本郷遺跡の南方には、川北遺跡、船橋遺跡が位置する。しかし、本郷遺跡は両遺跡よりも低湿地に位置するようであり、立地条件は必ずしもすぐれているとは言えない。本郷遺跡は、遺跡深度が比較的深く、湧水が激しいため、十分な調査は実施されていない。これは、反面では、遺跡が良好な状態で残っていることを示していると言える。今後、注目していきたい。

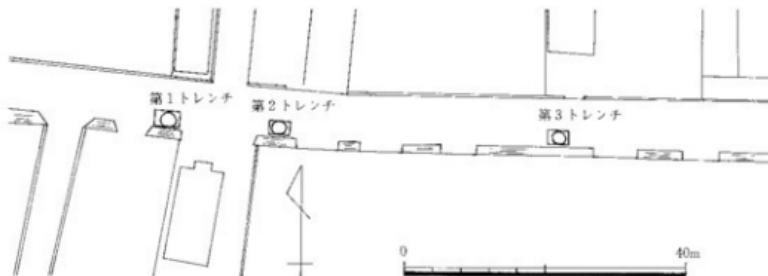


図-20 平板測量図

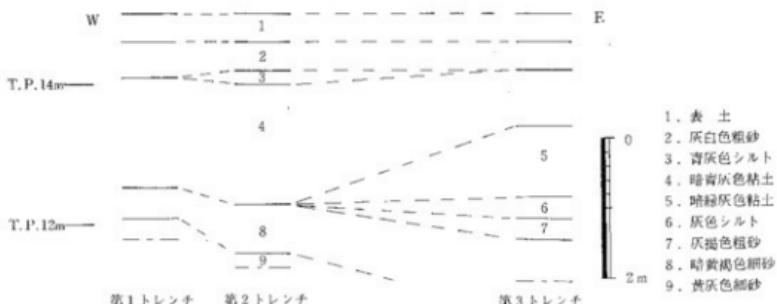


図-21 土層略図

3. 調査成果

①層序

各トレンチとも、遺構は検出されていない。

各トレンチの土層を比較すると、9層に分層できる。遺物は大部分が暗青灰色粘土層から出土しており、黄灰色細砂層から縄文土器が1点のみ出土している。暗青灰色粘土層には弥生時代中期から中世にかけての遺物が含まれる。暗青灰色粘土は下層に向かうにつれ、灰色から黒灰色に近くなるが、その変化は漸移的なものであり、分層不可能である。遺物は上層で古墳時代中期から中世の遺物が出土するが、数量は少ない。下層からは、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が出土し、数量も多く、遺存状態もよい。特に、弥生時代後期、古墳時代前期の遺物が多く、この時期の遺構が近くに存在すると推定される。

粘土層の下は、各トレンチとも砂層となっており、その厚さは1m以上におよぶと思われる。遺物は黄灰色細砂から中期末の縄文土器片が1点出土しているのみであり、この砂層の時期を示すものかどうか確認できない。いずれにしても、弥生時代中期以前に、かなりの砂の堆積時期があり、調査地付近に集落が成立するのは、弥生時代後期になると思われる。

標高は、現地表面でT.P.15m、暗青灰色粘土上面でT.P.14m、下面でT.P.12.3~13.4mである。暗青灰色粘土は第2トレンチで最も深く、第3トレンチで最も浅い。遺物も第2トレンチから最も多く出土している。しかし砂層は第3トレンチが最も深く、西から東へと傾斜している。

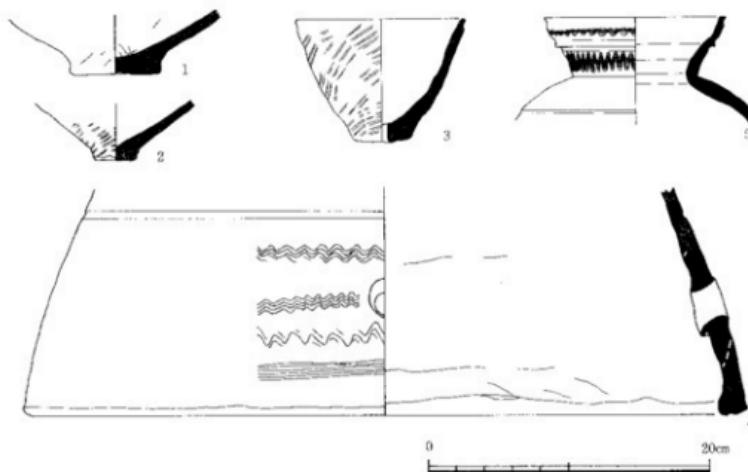


図-22 第1トレンチ出土遺物

②遺物

遺物は、各トレンチごとに記述する。

第1トレンチ

1～5は、いずれも暗青灰色粘土層から出土している。1～4は弥生土器、5は須恵器。

1は、壺、2は、甕の底部と思われる。2は、外面にタタキメがみられ、底面に木の葉圧痕が残る。3は、鉢。口縁部の調整は、やや粗雑である。外面にタタキメを施し、底部には内面から外面に向けての穿孔を有する。4は、高杯の脚かと思われるが、非常に大型で、推定直径51.4cmである。浅い凹線を一条施し、凹線と脚端部の間に、櫛描きの波状文を3段、直線文を1段施すが、施文法は粗雑である。円形の穿孔がみられる。器壁は厚く、脚端部は肥厚する。5は、甕であろう。外方へのびる口縁部は、明瞭な凸線を有し、端部は面をなす。口縁部と頸部外面に密な波状文を施す。

第2トレンチ

6～15は、暗青灰色粘土層から出土、20は黄灰色細沙層から出土している。

20は、縄文土器。波状口縁の一部であり、口縁部は丸みを帯びた凸線によって区画され、その区画内に、沈線による文様を施す。体部は、波状口縁の中央と思われる部分に2本の垂線を施し、その左方には波状の曲線が施される。2本の垂線の間、および垂線と曲線の中間位置には、縱方向に転がした縄文が残る。

6は、壺の口縁部。外面に2条の凹線を施す。7・8は、甕の底部。外面にヘラ磨きを施す。

9は、口縁部が外反した後、直立する甕の口縁部。10は、無頸壺の口縁部と思われ、穿孔を有する。11の高杯脚部は、四方に円形透孔が施される。

12は、二重口縁の壺。体部から直立する頸部は、大きく外反し、やや甘い段をなして、外方へ開く口縁部となる。体部は、ほぼ球形を呈する。外面はタテハケからナデ、内面はナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残る。13も二重口縁の壺である。体部から直立する頸部は、水平に外方へ開き、段をなして、斜上方へ直線的にのびる口縁部へと続く。14・15は、甕。14は、外方へのびる口縁部の端部を斜上方へつまみあげるようにヨコナデする。体部外面には、細かいタタキメが残る。口縁部内面は、ヨコハケから一部ヨコナデ、強いヘラケズリを施す体部内面との境は鋭い稜をなす。15は、口縁端部を丸くおさめ、体部は球形をなす。体部外面は、左下がりの粗いタタキメの後、左上がりのハケメを施し、内面もハケメを施す。16は、高杯杯部。体部から弱い段をなして直線的にのびる口縁部は、鋭い端部を有し、外面ヨコ方向のナデ、内底面はヘラミガキ、弱い段から口縁部にかけて、やや間隔が広い斜放射暗文を施す。17は、小型の器台。脚は斜下方へまっすぐ広がり、四方に円形透孔を有する。口縁端部は欠損する。全面ナデ調整によって仕上げる。

6～11は、弥生土器、12～17は古式土師器であるが、混在した状態で出土している。

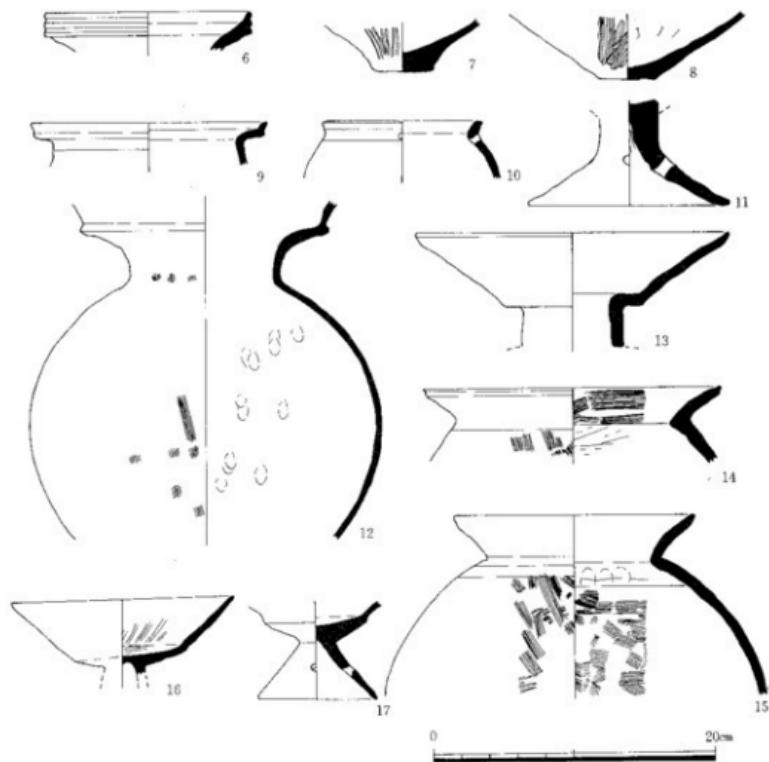


図-23 第2トレンチ出土遺物

第3トレンチ

18は、高杯の脚部。壺広がりの脚部は、三方に円形の透孔を有し、ナデ調整をする。19は、壺底部。底部中央は、ややくぼみ、外方へのびる体部は、内外面ともナデ調整である。

第3トレンチからは、あまり遺物は出土していない。
立会調査出土遺物

21は、縄文時代晩期の深鉢片。貼り付け凸帯に刻み目を施し、凸帯より下は、ヘラケズリを施す。縄文晩期の土器は、この1点のみである。

22は、土師質羽釜。口縁部は外反した後、垂直に立ち上がる。 図-24 第3トレンチ出土遺物



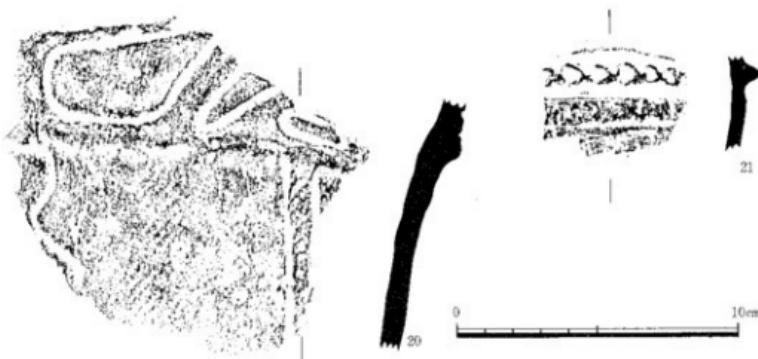


図-25 繩文土器

体部には、貼り付けた低い鉢がめぐり、煤が厚く付着し、内外面共ナデ調整。大和系であろう。
23は、瓦質の羽釜。やや内傾気味の口縁部は、外面に3条の凹線を有し、端部は面をなす。
鉢は薄く、やや上向きになり、端部は丸い。鉢より下方はヘラケズリ。内面はヨコハケからナデを施す。22・23は、いずれも14世紀頃と考えられる。

4.まとめ

今回の調査では、遺構は検出できなかったが、遺物は比較的良好なものが多い。しかし、弥生土器と古式土師器は、混在した状態で出土しており、層位的に分かれるものではない。遺物の残存状態。狭いトレンチに比して豊富な量は、集落が近くに存在することを推測させるが、弥生土器と古式土師器の混在した状態は、今回の調査地が、集落の中心部ではないことを示していると思われる。

また、繩文時代晩期の土器は、以前の調査でも確認されているが、中期末の土器は初見である。砂層から1点出土しているのみであり、近辺から流されてきた可能性も考えられるが、生駒山地西麓の繩文時代の遺跡と比較し、沖積地での繩文土器の出土は、注目されるであろう。

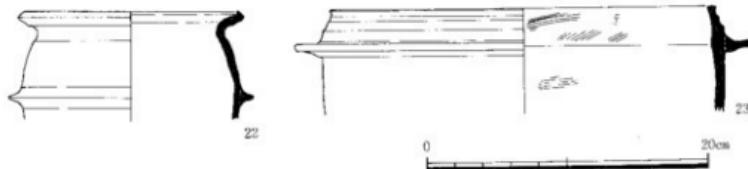


図-26 立会調査出土遺物

本郷遺跡—2

1. 調査経過

柏原市本郷3丁目における、山下建設株式会社による分譲住宅建設に先立つ調査である。調査対象面積は、約2,000m²であり、当初全面調査を考えたが、約50cmの盛土を行ない、木造住宅を建設するということであったので、とりあえず、盛土表面から約1.5m掘り下げるマンホール6箇所の中、2箇所について調査し、その結果をもとに、再度協議することにした。

調査の結果、包含層はT.P.14m以下に存在することが判明し、盛土予定面(T.P.15.5m)より1.5mの深さを有する。そのため、盛土予定高をT.P.15.7m前後とし、マンホールの深さを1.5m以内とするならば慎重工事による住宅建設を認めるという条件を呈示し、山下建設株式会社もこの条件に同意したため、住宅建設を認めた。

マンホール部分2箇所の調査は、山下建設株式会社の負担により、1983年10月20日から22日まで実施した。今回の調査地は、水道工事に伴う調査地の北約700mであり、遺跡の北端に位置すると考えられる。遺構は、溝状遺構が確認されたのみであり、遺物の量も少ないが、弥生時代中・後期の土器、土師器、須恵器、円筒埴輪などが出土している。

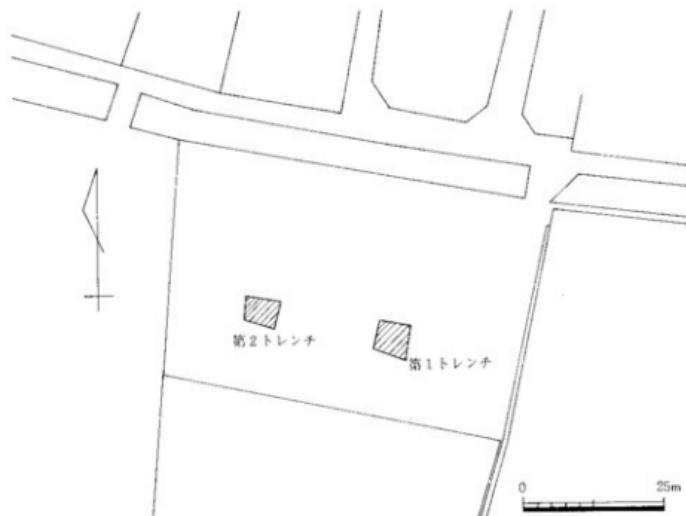


図-27 調査地周辺平板測量図

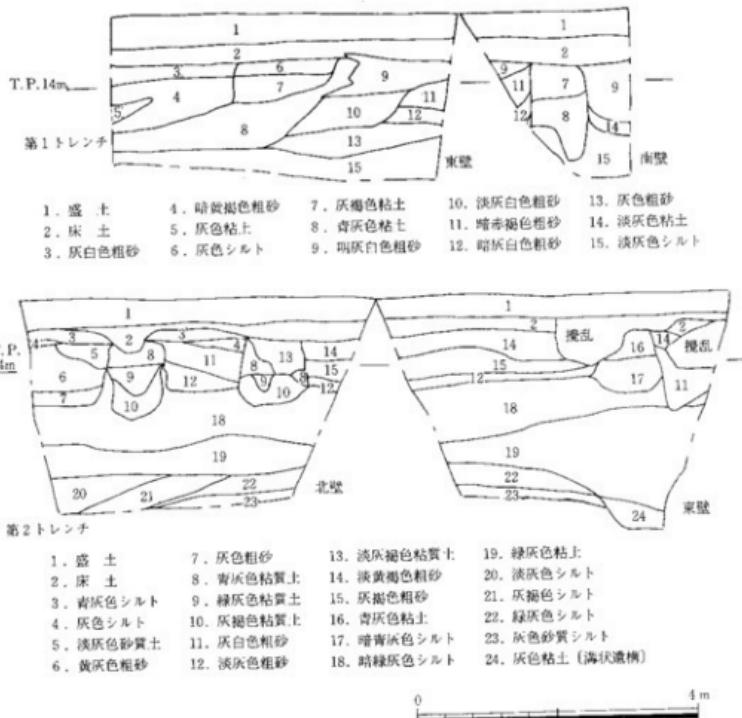


図-28 土層図

2. 調査成果

①層序・構造

両トレンチとも、湧水が激しく、壁面が数回崩壊した。このため、十分な土層図を作製できず、また、更に掘り下げる予定であったが、危険が伴うため、第1トレンチは約2.5m、第2トレンチは約3mの深さまで掘削したのみである。

層序は非常に複雑である。砂・シルト・粘土が入り混じて堆積しており、旧大和川の氾濫の激しさを物語っている。これは、約80m南での水道工事に伴う調査の際の整然とした土層と非常に対照的である。

土層断面にみられる断面方形を呈する溝状構造は、水田に伴う水路であろう。現代の床土下に見られるこの水路は、出土遺物などからも近世と考えられる。

第1トレンチと第2トレンチの断面も大きく異なるため、層の対比が困難であるが、第1トレンチの第8層青灰色粘土から弥生時代後期を中心とした遺物が出土し、第2トレンチ第18層

暗緑灰色シルトから、円筒埴輪・須恵器長頸壺が出土し、第24層灰色粘土から弥生時代中期の土器が出土している。

遺構は第2トレンチ第24層灰色粘土を埋土とする溝状遺構が確認された。溝状遺構の北側の肩は確認できたが南側はトレンチ外である。埋土からは、無頸壺（8）、壺底部（9）が出土している。

② 遺物

第1トレンチ

1は、壺の口縁部。端部は垂下し、外面に擬回線、竹管文を施文する。2～4は、壺の口縁部。2は、くの字状に外反し、端部は面をなす。3は、弱く外反し、端部は丸くおさめる。4は、端部つまみあげ状になり、面をなす。5・6は、高杯の脚部。5は、外面タテ方向のナデ、内面にシボリメが残る。6は、短く、脚裾部が広がる。四方円形透し。

第2トレンチ

8・9は、溝状遺構（灰色粘土）から出土、他は暗緑灰色シルトから出土。

7は、外反する壺の口縁部。頸部にはタテ方向のヘラミガキを施す。8は、無頸壺。折り返し状の口縁部外面には列点文が施される。下ぶくれの体部には麻状文を5段施す。内面はナデ調整。9は壺底部。外面タテ方向のヘラキガキ、内面はハケメを施す。

10は須恵器の長頸壺。細い頸部は、大きく開き口縁部となる。文様は見られない。

11～14は円筒埴輪。口縁部は体部から直線的にのび、端部は面をなす。凸帯は、いずれも低く、断面三角形状のもの（11）と、半円状のもの（12・14）がある。外面調整は、いずれも左上がりのハケメ、内面はナデである。透孔は、大きな円形、（11）には口縁部にヘラ記号が施されている。

遺物の量は相対的に少なく、無頸壺（8）を除くと、良好なものは少ない。また、埴輪は表面がやや磨滅している。

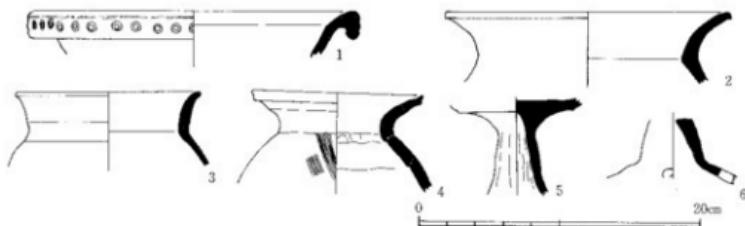


図-29 第1トレンチ出土遺物

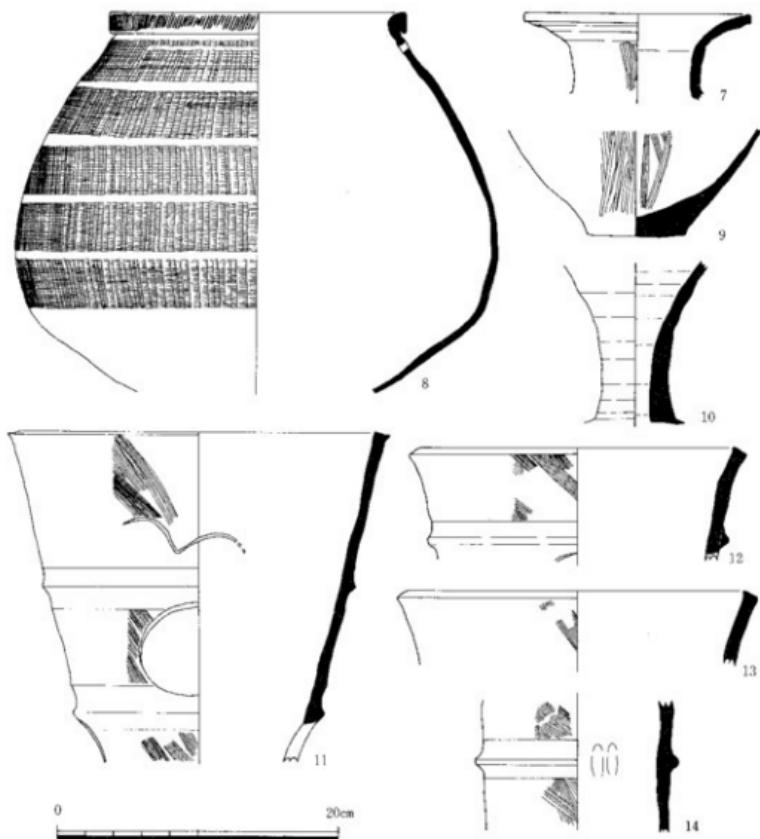


図-30 第2トレンチ出土遺物

3.まとめ

弥生時代中期中葉の溝状遺構が発見されたが、その性格、規模を明らかにすることはできなかった。その他の時期については、遺物も少なく、不明な点が多い。その中で、第2トレンチから出土した円筒埴輪は注目に値する。円筒埴輪は、第1トレンチからは出土しておらず、第2トレンチの近くに古墳が存在したものと思える。1981年度の調査でも円筒埴輪、家形埴輪が出土しており、いずれも6世紀前葉頃と思われる。最近発見が相続いでいる沖積地における古墳群が本郷遺跡にも存在するのであろう。平尾山古墳群との関係からも、今後、注目していく必要があるだろう。

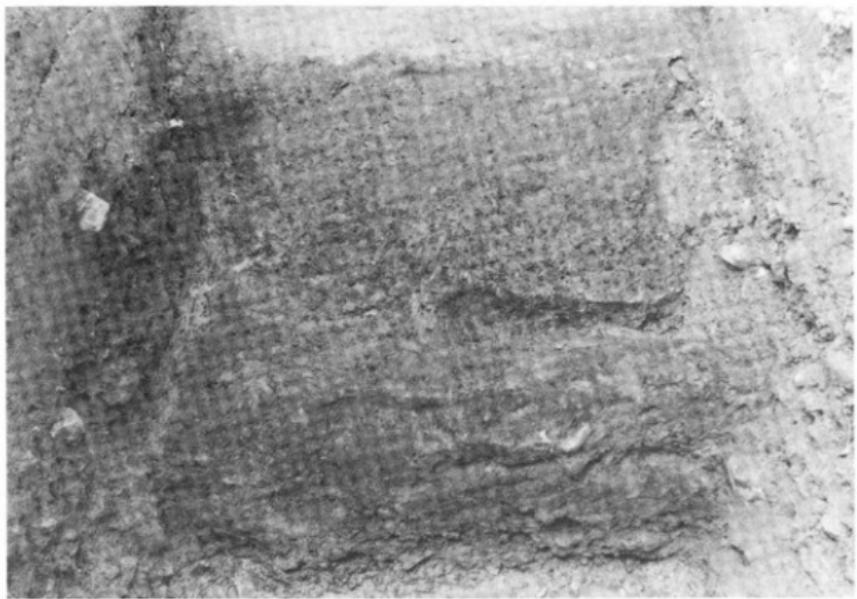
図 版



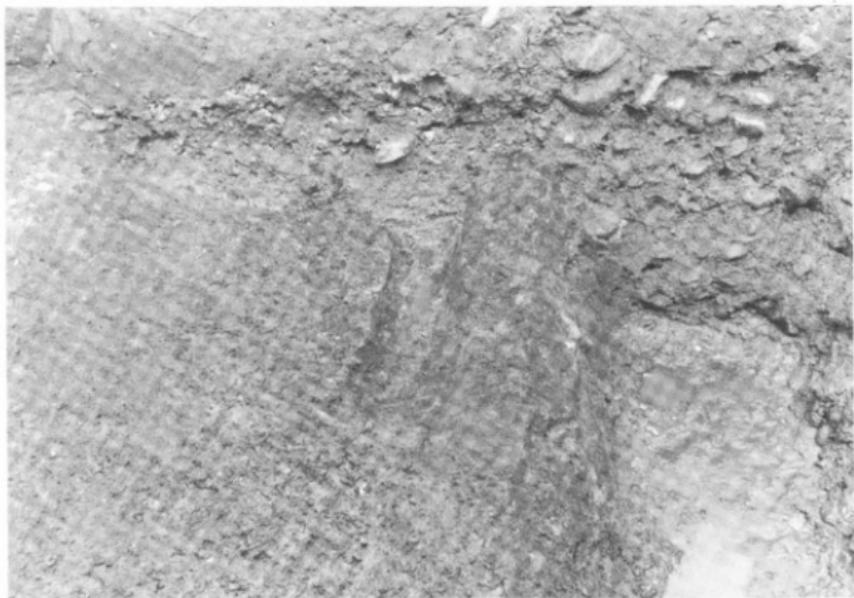
南から



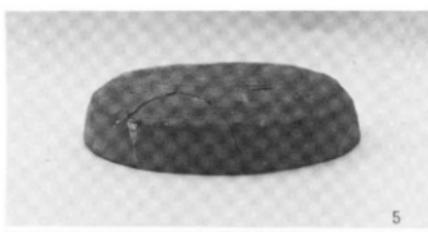
西から



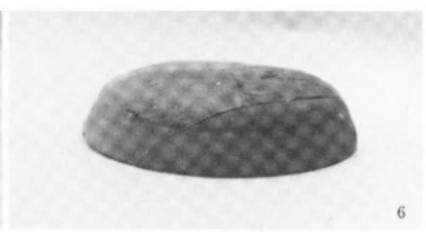
南から



西から



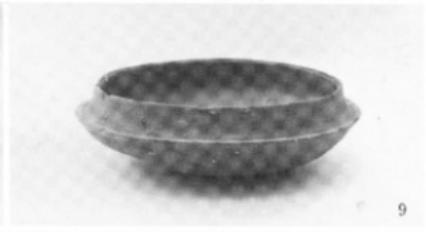
5



6



7



9



17



18



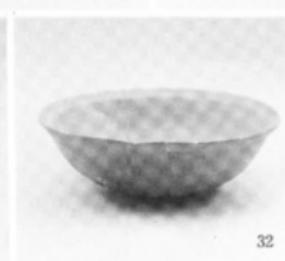
26



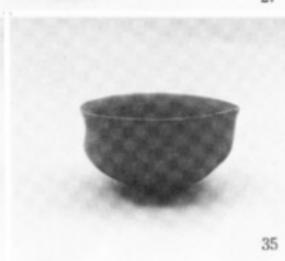
27



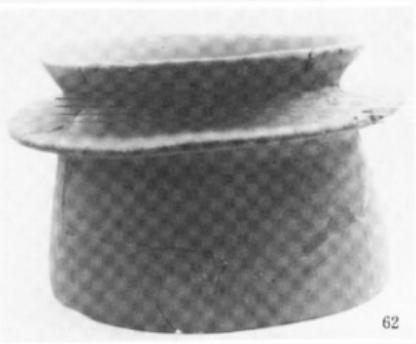
29

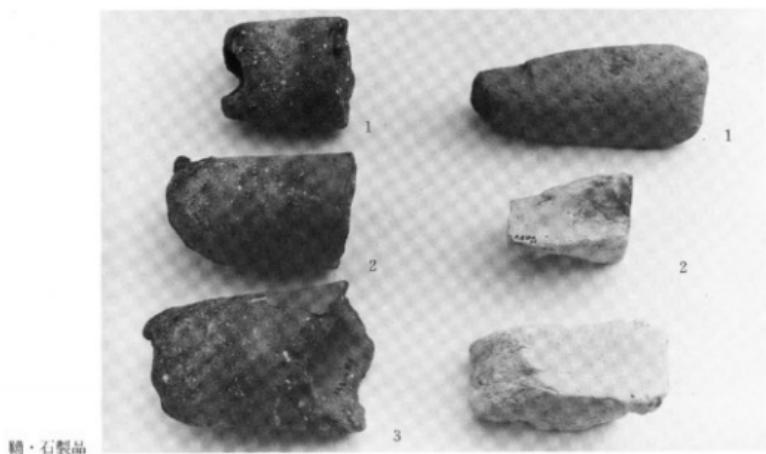


32



35





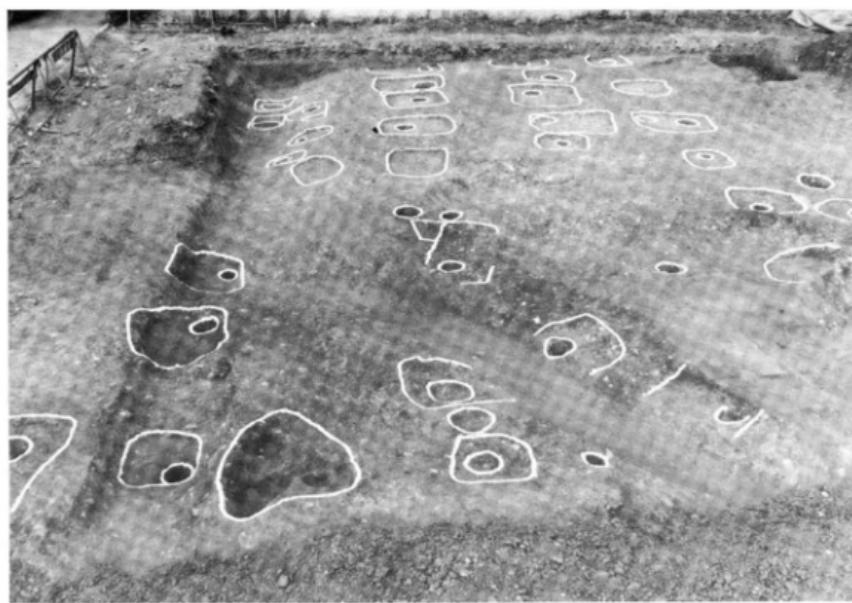
1. 石製品



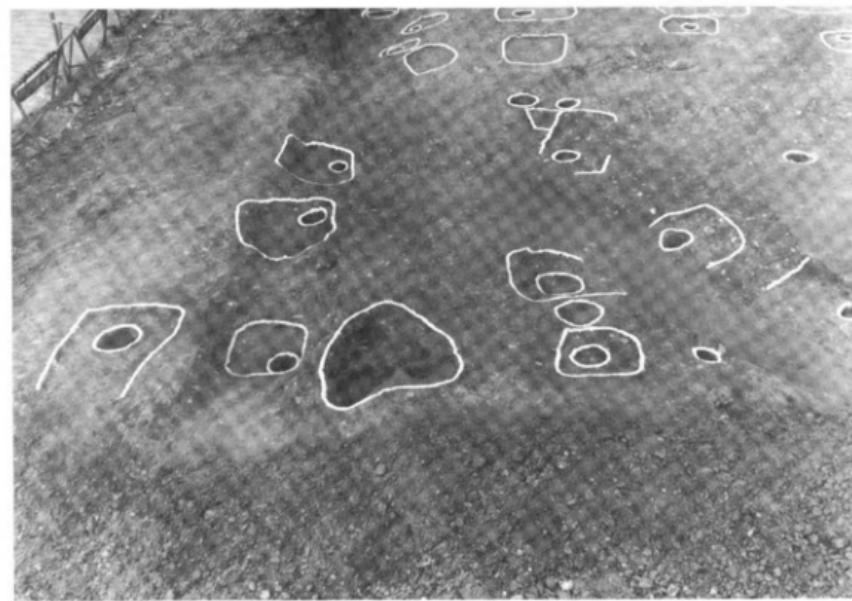
2. 鉄滓



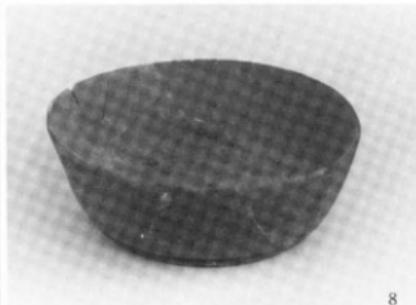
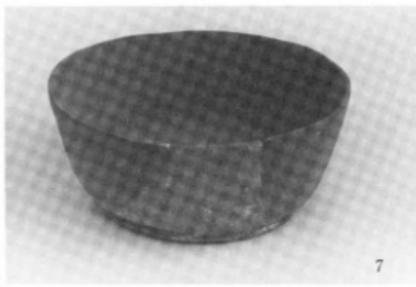
3. 骨



全景

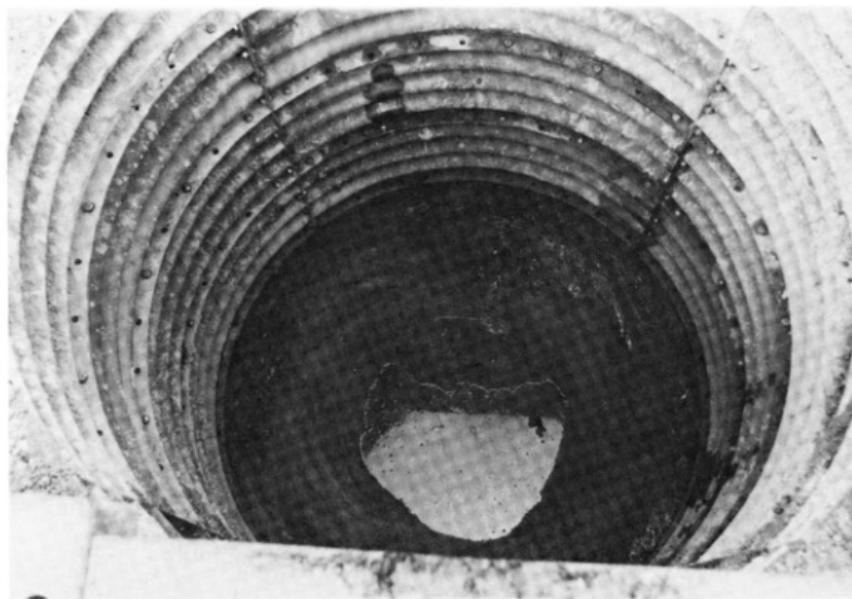


南西造構





調査風景



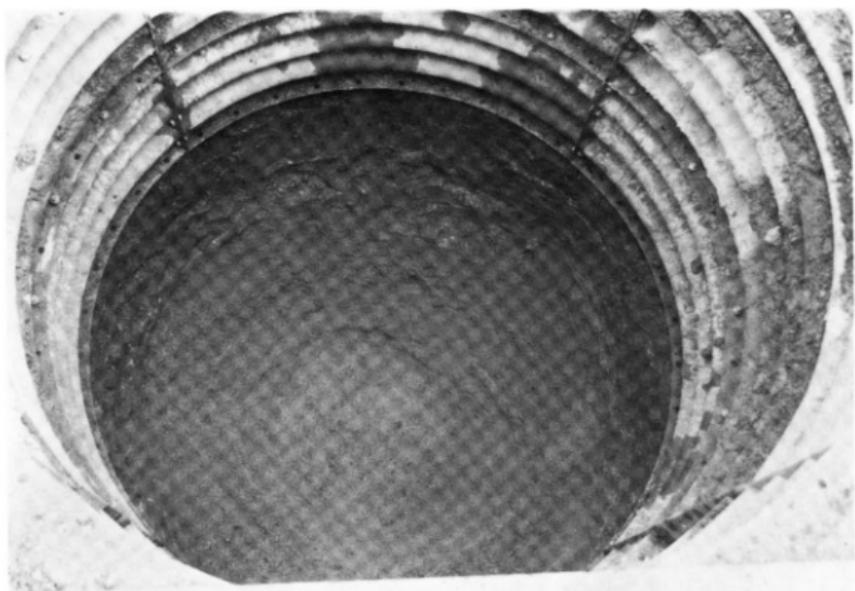
第1 トレンチ



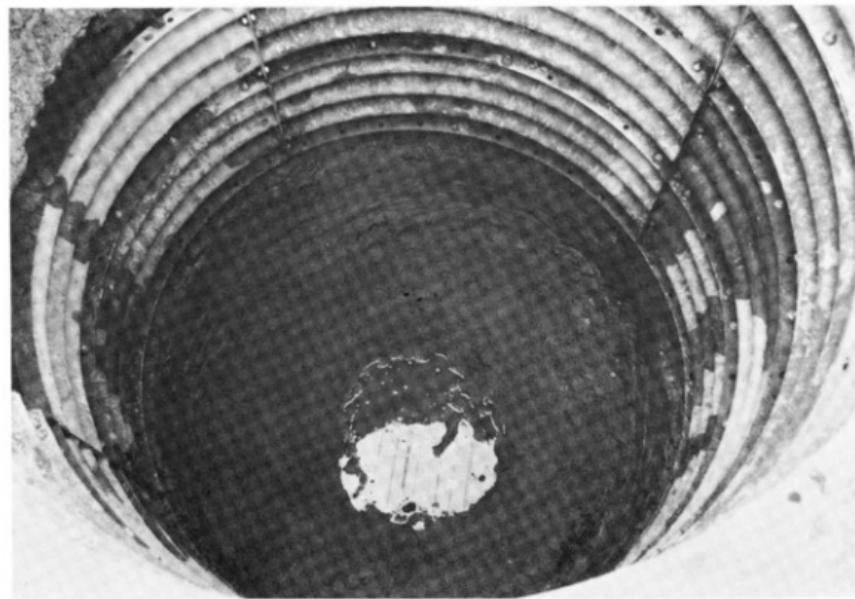
第2トレンチ遺物出土状況



第2トレンチ遺物出土状況



第2トレンチ



第3トレンチ



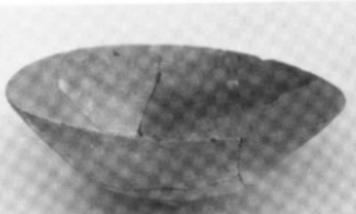
3



11



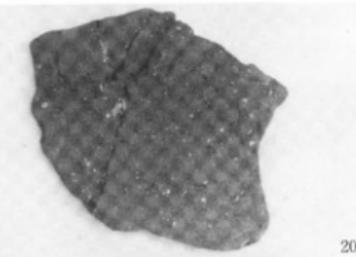
13



16



17



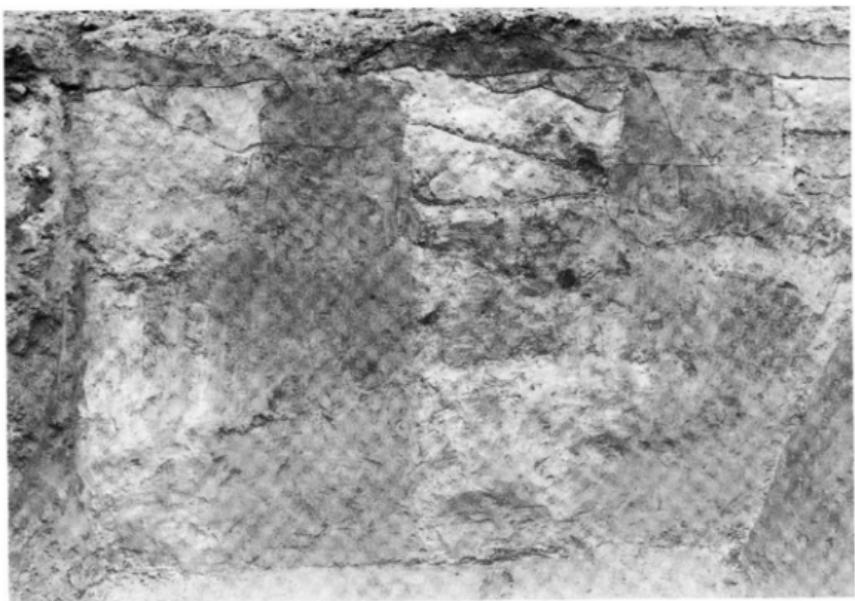
20



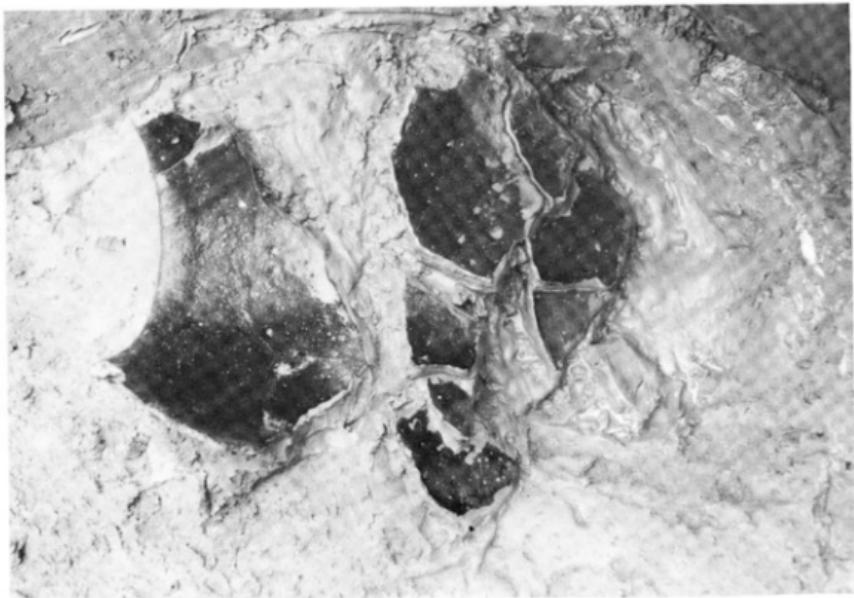
12



15



第1トレンチ



第2トレンチ遺物出土状況



8

無頸壺



11

圓筒埴輪

柏原市所在遺跡発掘調査概報

1983年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 0729(72)1501 内線 716
発行年月日 1984年3月31日
印 刷 株式会社 中島弘文堂

